

昭和二十四年七月二十三日  
昭和五十六年二月十五日

第三種郵便物認可  
発行（毎月一回・十五日発行）

（通第三八〇号）

# 慈光

第三十三卷 第二号

## 次

実生活と真宗教……………	近角常観……………	(1)
御一代記聞書抄（続・一六）……………	井上善右衛門……………	(6)
水の味……………	高原憲……………	(9)
一道会の記……………	榊原徳草……………	(12)
念仏詩抄……………	木村無相……………	(20)
ともしび……………	花田正夫……………	(23)

# 実生活と真宗教

近角常観

「世間虚仮 唯仏是真」

聖徳太子遺訓

○ 実生活という標題を掲げるときは、人は直にこれを握まんと欲するのである、即ち生きんと欲し、努力せんと試みるのである。しかるに実生活はかえって生きんとして生くる能わず、努力せんとして努力する能わず、かえって人生は皆虚仮なるものなることを知りて、その虚仮を見捨てたまわぬ御恵みが、唯一仏陀の真実なることを信じたるときに実生活が生じ来るのである。

○ 聖徳太子の御遺訓が、世間虚仮、唯仏是真ということをお仰せられたということは、天寿国曼陀羅の銘に書いてあるのである。如何にも穢土をすてて真実直如の仏のみ国にお帰りなさるときは遺訓として、実に我等骨髓に徹する仰せである。しかしこれが一代四十九歳の間、政治、文学、美術、慈善、すべて世間的経営の実生活を貫いて御働き下さ

れた御精神なることを忘れてはならぬ。

○ 全体実人生と真信仰ということについて大いに着眼せねばならぬ二個の点がある。一つは今日の時代精神、もしくは近代思想なるものと仏教とは、根本的にその立脚地を異にすることである。

○ 何時の時代にしても我等人間の立場としては、我等の生活を真実なるものとして肯定せんとするのは凡夫の常である。殊に近代思想においては、大いに人生を肯定して生きんとし、努力せんとし、真実なるものとし、實在なるものとせんと試みつつあるのである。しかるに仏法の根本義は人生は無常である、生老病死は苦である、世間は虚仮である、諸行は無常である、諸法は無我である。我等は煩惱具足である、世界は火宅無常である。結局消極である。これ根本において東西方角を異にするように、黒白色を異するよ

うに、全然立場を別にすることを注意せねばならぬ。

○ かくの如く全然消極とすれば、如何にしてこの虚仮不実の人生が救済せられ得るか、是が第二の着眼点である。曰く人生世間の虚仮なることと、仏陀救済の真実なることとの関係である。

○ 世間虚仮、唯仏是真といい、又煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、みなもてそらごとたわごとまことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわしますといえは、直に世間と仏法とを黒白清濁を並べたるが如くに感じ易いのである。世間を捨てて仏法に入る様に考えられるのである、こう云えば何となく遁世、隠遁、出家発心、捨家棄欲であらねばならぬように考うるのである。

○ いかにも世間は黒に違いない、然れども仏法の白は是と相対的にあいならんだ白ではない。その世間の黒をして遂に白ならしむるまでの白である。煩惱は濁りに違いない、然れどもその濁りに対立しつつある清の仏法ではない。如何なる濁れる煩惱の水もへだてなく、飽まで清めてしまいう清らかなる弥陀の清水である。本願力に遇いぬれば、むなくしくすぐる人ぞなき、功德の宝海みちみちて、煩惱の濁水

へだてなし、である。

○ 不断煩惱得涅槃といい、出家発心のかたちを本とせず、捨家棄欲のすがたを標せず、というのが、黒を飽くまで白からしめ、濁りを飽くまで清からしむる本願他力真宗の真面目である。

○ 白からしむるとか、清からしむるといえば、煩惱を断じたり、心を清くすることのよきこころを飽くまで見捨てたまわぬ大悲心である。不真実、不清浄なる我等を哀愍摂受したまう如来の真実清浄の御心である、これを白といひ清といふたのである。

○ 近頃多く青年求道者にお話するとき、求道者の豫想とお話をする我等との心のくいちがう点を明瞭にすることを得た。誰も人生において無常とか、不実とか、不浄とかを感じたるとき、これを自己そのものに帰することを忘れて、これと引換に、常住、真実、清浄を求むる人が多い、そこでこの如き仏陀の存在を疑うという結論に達することになる。

宗教は飽くまで自己の救済である、個人の自覚である、我身の悟りである、わが生の救いである。故に人生の無常と云い、不実と云い、不浄と云うが、これを自己の上と感じねば何ともならぬ。如何に他人が老病死があるが、釈尊がこれを自己の上に観ぜられなれば国を捨て城を出られることはなかるう。そのように、人生が冷たいとか、世間が暗黒であるとかいうときに、徒らに他人の冷酷なことをや、世人の暗黒面のみを見て、我身の冷酷なこと、暗黒なのに気づかぬものが多い。

もし極端に言わしめると、他人を冷酷なりと評するは、その裏には我身は親切なりと誇りつつあるのである。世人は暗黒なりと云うは、我身は光明ありという換言と見てもよい。されば一步許して、それ程親切な我身でも、他人の冷酷に接するときは自己も冷酷になるではないか。それ程光明なる自己でも世人の暗黒に接するときは、また暗黒になるではないか。否今日まで親切である。光明があると思つていたのは、つまり他人や世人の親切や光明を豫期した条件付きの親切や光明にして、この如きものはむしろ相対的、報償的なる、すこぶる不真実、不清浄な名聞利養に過ぎないことになる。して見れば、結局最後の問題としては自己が虚仮である、不真実である、不清浄であるという問題

になるのである。

善導大師が「我身は現にこれ、罪悪生死の凡夫」と云われたことは、実に千古不磨の大德音である。人生問題、信仰問題に手を染めるものは、我身は現に是れ罪悪生死の凡夫ということ忘れてはならぬ。しかし黒ばかりでは黒は知れぬ、濁りばかりでは濁りは知れぬ。如来の眞実清浄の清白があらわれねば分からぬ。眞実の法に出遭つて機法二種の深心が一度に起るのである。

それかといつて、如来清白の法と、我等の黒濁の機と比して自覚するのではない。我等の黒濁を飽くまで哀愍摺受したまう清白のお慈悲である、我等が人生世間の冷酷なるに冷却せしめられて、また冷酷となれるを悲憐したまいて、その冷酷をあたためずんば止められぬという大慈大悲が、如来の超世希有の大願である。

親切なれば迎えられ、冷酷なれば却けられるが世の常なのに、かく冷却してしまつたのを憐まれて、冷酷な程見捨てられぬというが救済の本意である。超世希有の正法と名づけられる所以である。

ここに到れば、如来会の御文を想い起さしめるものがある、曰く彼国の衆生、もしくはは当に生るべき者、皆ことごとく無上菩提を究竟し、涅槃の処に到らしめん。何をもつての故に、若し邪定聚及び不定聚は、彼の因を建立せることを了知すること能わざるが故にと。

如来は何を以て彼の因を建立したまえる。南無阿弥陀仏の念仏は破戒、無戒、愚痴、無智、少聞、少見、罪業深重にして何れの行も及びがたき衆生のために、すでに建立したまえる大行なり。これ彼の因を建立したまえる所以なり。その罪悪の衆生とは他人ならず、我身一人にあらずや、聖人の常の御述懐に、弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業をもちける身にありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ、とあるのも、つまり我身一人の罪悪のために建立したまえる念仏なり、噫、何たる恩徳ぞや、何たる大悲ぞや、実に不思議なり、仏智不思議なり、和讃に曰く。不思議の仏智を信ずるを、報土の因とし

まいし尽十方無碍光仏にてまします。具縛の凡愚、屠沽の下類、如何なるものと云えども、刹那に救済したまう名号なり、光明なり、誓願なり、仏智なり、仏智不思議なり、誓願不思議なり、名号不思議なり、不可思議光なり、西方不可思議尊なり。

たまえり、信心の正因うることは、かたきがなかなおかつたし、と。

この如く罪悪深重の無明の大夜をあわれみてあらわれた

法然上人は我等は発菩提心が出来ぬと云われた、而して親鸞聖人は信心は浄土の大菩提心なりと云われた。法然上人は諸善と念仏を對比されて廻向と不廻向と云われた。親鸞聖人は念仏を如来廻向の大行と云われた。法然上人は破戒無戒のもののための念仏と云われた、親鸞聖人は一生之間、能く莊嚴し、臨終に引導して極楽に生ぜしめんの信仰的家庭を実現された。法然上人は五遍まで一代経をひもとかれたけれども、選択集には三経一論を選択し、善導一師に依られた。親鸞聖人は教行信証に一代経をみな如来眞実の顕現なりとして、往生之業念仏為本の一句より、三朝淨

土の宗師の真宗興行を仰がれた。法然上人の消極は親鸞聖人の積極によりて顕われた。法然上人の一向専修の念仏が、親鸞聖人の本願他力真宗となったのである。

これが虚仮不実の人生を哀愍授受したまう唯一の如来の清浄真実にてまします。これあだかも三心積の聖人の文点に、一切衆生の身口意の所修の解行、必ず真実心中に作したまいしをもちいんことを明かさんと欲う。外に賢善精進の相を現ずることを得ざれ、内に虚仮をいだけばなりの真意である。而して聖徳太子の世間虚仮、唯仏是真の遺訓と全く同意である。これ親鸞聖人が「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界はすべてのことみなもてそらごとたわごとまことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわしますとの金言と、前聖後賢、符節を合わせたるが如しである、これ念仏成仏是真宗の真髓である。

### 歌集「心光」

福島政雄

まぼろしの世ぞとをしへてみ仏の刹くわにかへりぬあはれわが子は  
大正八年和子・世を去りぬ

ありし日のおもかげ見ゆる心地して花咲く庭を今日もながめつ

昨日までもに摘みにし白き花をけふはたむけとなすぞかなしき

子をおもふ心の闇の底までもてらすほとけの道ぞうれしき

かくばかりおもひみだるるわが胸をあはれみたまふ三世の御仏

夢の世とききつつもなほさととり得ぬやみのころのわが身なりけり

## 御一代記聞書抄 (続・一六)

蓮如上人願誓に対して仰せられ候「法敬と我とは兄弟よ」と仰せられ候。法敬申され候「是れは冥加もなき御事」と申され候。蓮如上人仰せられ候「信を獲つれば先に生るる者は兄、後に生るる者は弟よ、法敬とは兄弟よ」と仰せられ候。仏恩を一同にうれば信心一致の上は四海みな兄弟といへり。(第二四六条)

人間に執我が無意識に潜んでいるかぎり、差別観念を離れることは出来ません。個人はもとより国家にあつても、その国家を形成する人々の共業によつて、国家の集団エゴというものが生れます。国益という美辞のもとに、国家と国家が相争います。そしてその果ては戦争という惨事を引起します。これは近代国家にかぎつた事ではありません。有史以来の覇権の争奪は全くここに由来しているものです。

## 井上善右工門

まことに悲しむべき人類の業であります。

戦後国連が創設されて以後三十五年間、世界の何処かで次ぎ次ぎと戦争が連続してはありませんか。現に今日もそうでありまして、たとえ今戦っていない国々の底にも戦争の因が秘め宿されていることは事実です。国連の活動を評価したいですが、何といつても対象療法の域を脱しません。世界の人類は今こそ心して真剣に戦争の因の抜本的除去に思いをいたすべきです。人間そのものが斗争の原因主体である限り、人間の斗争本能が消えやらぬかぎり、戦争の脅威は人類の業として背負い続けねばならぬであります。

宗教が深く個人主体の問題に関わるかぎり、こうした観点から重大な平和への意味をもつています。社会の諸問題に対する批判活動や反対運動はそれぞれの意味をもつことですが、問題の根源が単に外的な欠陥から生じているのではなく人間存在そのものの本質に根ざしているかぎり、個人

主体そのものの根源に平和の光の到来を求めることは、最も緊急な人類の使命でなければならぬと思います。なぜ世界の諸宗教はこの点に力を結集しないのでしょうか。

## 二

蓮如上人が法敬坊順誓に対して「法敬と我とは兄弟よ」と申された言葉には、何という親愛の情があふれている事でしょう。法敬は胸うたれて「是れは冥加もなき御事」とお答えしました。「冥加もなき事」とは「あまりにも勿体ない御言葉です」と申上げたのであります。すると蓮如上人が「信を獲れば先に生るる者は兄、後に生るる者は弟よ、法敬とは兄弟よ」と申されました。これはおそらく『論註』（下）に曇鸞大師が「同一に念仏して別の道なきが故に、遠く通ずるに四海の内皆兄弟なり」と語られている言葉を思い出されての事でありましょう。

念仏の世界には一味平等の真実が輝きます。人間の意図や理性では何ともならぬ差別觀念が、如来の真実心に照らされて自から霧散するのであります。現在只今同一念仏の人でなくとも、一切衆生に対し「三界は我が有なり、その中の衆生は悉く我が子なり」とのたまう如来の真実心に触れまつれば、どうして自他差別の思いに止まつておれましよう。我れも人も如来のひとり子であることに何の変りもないのです。

を上人は思い合わされていた事でしょう。

無我の真実界とは仏教の根本原理ですが、それは決して容易な世界ではありません。ナムアミダブツの名告を通して、この無我の光を我々に送りとどけて下さる如来の徳を頂戴し、その御苦勞を偲ぶのが浄土真宗です。その無我の真実には、寂けさ（統一）、安らぎ（落着き）明るさ（破闇）、輝き（活動）、よろこび（感謝）、平等（一味）の徳が我が心を潤ほして、人の世の波乱を治して下さいませ。無我の真実は体験の事実が、これを証するという外ありません。祖聖は「至徳の風静かに衆禍の波転ず」とその趣きを語っておられます。

真実界たる浄土は彼岸の世界ですが、それが必ず此岸に光被して下さいませ。『末灯抄』に「この世にて真実信心の人をまもらせたまえばこそ、阿弥陀経には十方恒沙の諸仏護念すとはまふすことにて候へ、安樂浄土へ往生して後にまもりたまふことにて候はず。娑婆世界にいたるほど護念すとはまふすことなり」と申されています。白井成允先生が「慶ばしいかな、身は娑婆にありつつも、すでに浄土の光耀を蒙る」と招換の詩に歎けられてはいる消息もここにありましょう。

「法敬と我とは兄弟よ」と申された、そこに人類永遠の平和の源泉のあることを有難く／＼感じる次第です。

最近のある陶芸家について次のような話を聞きました。ある日その人は狂気のように帰って来て「今日はすばらしい日だ。すばらしい事が起った」と踊り上らんばかりです。そうして家族の人達にこう語ったそうです。「自分は今まで二つの世界をもっていた。善悪、美醜、正邪という二つを。けれども今日は世界が変わってしまったものを見た。栗の木葉が虫に喰われて哀れな姿、人が虫で自分が木葉のように思っていた。ところが今日は全く違って見えた。葉っぱは虫を養っている。虫は葉っぱに養われている。今日その事を判らせてもらうた……そして驚いている自分に驚いている。この景色を入れる眼は何と大きな眼だろう。この世は自分を探しにきた処、この世は自分を見出しに来た処、何という大きな調和の世界であろう……」と。

## 三

先の「同一に念仏して別の道無きが故に」という曇鸞大師の心を聖人の和讃には「……真実信心ひとつにて無別道故とときたまふ」と誦されています。念仏の光がさし込んで、この自他差別の胸を照し、無別道故の平等界を照し出して下さるのです。そして四海の内皆兄弟なり」の言葉には同時に『安樂集』の「前に生れん者は後を導き、後に生れん者は前を訪い、連続無窮にして、願はくは休止せざらしめんと欲す。無辺の生死海を尽くさんが為の故に」の句

## 梁塵秘抄

不輕大士品

不輕大士のおまへには、逃るる人こそ無かりけれ。誹ヒる縁をも縁として、遂には仏になしたまふ。

不輕大士ぞあはれなる、我深敬汝等と唱へつつ、打ち罵り悪しき人も皆、救ひて羅漢となしければ

仏性真如は月清し、煩惱雲とぞへだてたる、仏性遙ほかにたとみてぞ、禮拜久しく行ひし

弥陀仏の誓

弥陀の誓ぞたのもしき、十悪五逆の人なれど、ひとたび御名を称ふれば 来迎引接疑はず

阿弥陀仏の誓願ぞ かへすがへすもたのもしき、一度ひとたび御名をとらふれば、仏になるとぞ説きたまふ

極樂浄土のめでたさは、一つもあだなることぞなき、吹く風立つ浪、鳥もみな、妙たえなる法をぞ唱ふなる

# 水の味

(医師) 高原 憲

## 同悲同歎

(一)

泉青が往診してみると、父親が病人の添寝をしています。病人というのは七才になる女児で、永らく腹膜炎で養生しているのです。病勢がつのつて来て、時々腹痛を訴えて来ました。父親は病児をなでながら「痛かろう、痛かろう、」と喋っていたわっているのです。この様子を見て胸を打つものがあります。泉青が診察をはじめようとしていると若い妻君が出て来てこういいます。「痛かろう、痛かろう」と、自分から弱いことを云うので甘えるのです「父親を斜に見下して」「すこし我慢させなさいよ」と。また泉青の胸をどきんと打つものがあります。

実はこの妻君は、この児の継母なのです。

落伍者こそ被害者の母親でした。

(三)

泉青も毎日威勢よくスタートを切って病人から病人へと走り廻っています。腰を抜かして落伍者にはなりそうになりません。忙しければ忙しいほど元気です。

「病人が危篤になると先生も御心配でしょうね」と御挨拶を時々つけることがあります。穴があれば入りたいようです。元気のよい継母、人の子のため益々走り出す母親、これが泉青の相でした。

(四)

母病めば 秘密の箱をあくるごとく

ためらいつつも聴診器をとる

## 寿命

「私の病気が治らないことはよく承知していますが」  
こう云って泉青の前に坐った男がいる。年は五十六才。頑丈らしい体格ではあるが、どことなく疲れた様子である。顔はややはれ気味である。

「治らないことがわかって何故やって来ましたか？」  
「私の寿命を聞きに来ました。今から何年生きられるか、それを聞きに来たのです。先生はなかなかうまくあてると

(二)

各自二、三人の孫をつれて四人の娘が祖母のもとに集りました。久し振りに若い母親達が炉辺会談に夢中になっているうちに、孫達はいつのまにかいなくなりました。雄弁家達があたりの静けさにふと気づいて見ると、子供がいません。何処へ行ったろうと、いくらか心配している矢先、「大変です、子供さんが川へおちました」と注進に及ぶものがあります。四人の母親はいっせいに立ちあがり、スタ—とを切りました。まさに二百米競争です。物凄い勢で川の方へ走ります。各自は心のなかではまさか自分の子供ではあるまいと、一縷の望みをかけながら走っているのです。百メートルも来たところ第二の注進がやってきました。「川へ落ちたのは何々さんです」という報せが聞こえたその瞬間、一人の走者はふらふらと腰を抜かして地面に坐りこんでしまったのです。他の三人の走者は益々元気よくへビーをかけました。

いうことです。私の友人にも二、三みごとに的中したのがあります。

「うまく当たったら困るでしょう」

「覚悟のまえです。だが出来ることなら今から六年だけ生きたいです」

「六年とはどうした計算ですか」

「そうしたら子供が一人前になるのです。それが不可能ならそれでもいいかたがない」

「はつきり申しましょう。先ず診察したうえにいたしましよ」

泉青の町医者生活二十年、この男のように真剣に自分の余命いくばくぞとつめよつたものはない。医者にとっては一番むつかしい問題であり、病人にとっては一番ふれたくない問題である。この予後の問題が町医者の浮沈の鍵である。大丈夫という口の下にコロリと病人が倒れたら、それこそ一大事である。早速篤医になってしまふ。しかしこれ位難中の難はない。医学が進歩すればする程、この問題の解決が楽になるであろう、また医者多年の経験もなくてはならぬ。診察しながら泉青は学生時代のことを思い出した。内科の外来で、ある教授がこんなことを話されたことがある。肺結核の患者から予後のことを聞かれて、あと一ヶ月位のものであろうと答えてやったら、一カ月経つても生きてい

る。半年経っても変りがない。一年二年と年月は流れる。とうとう十年間病人は医者<sup>の</sup>無能をのりして倒れたということである。教授は予後判定のむずかしさを懇々と教えられた。今日病人に接するようになって、はじめて泉青はこの味が今更のように味わわれるのである。

この男の病気は、彼自ら不治だと言ったが、たしかに不治の萎縮腎である。血圧は二百五十を越えている。尿の蛋白は著明である。心臓の肥大もかなりである。刻一刻と悪化をたどるだけのことである。「はつきり申し上げましょう」とたった今口を切ったが、あと何年とはつきり宣言されるものではない。大体の見当はつく。

一通り診察がすむと、この男はまた泉青にせまってくる  
「あと幾年生きられましょうか」

「あと幾年？とですが。はつきり申し上げれば、あなたの寿命は今日一日限りです」

あと幾月したら、あと幾年したらと夢を追うて行くのが私達の生活である。しかし障子一枚先も見えないこの目にとどして明日が見えようか。明日の幻影を追うものは、今日一日の生活を失っている。まずいただかねばならぬのは今日一日の豊かな生活である。

最後の目標へ方向を決めて、今日一日を生き抜くものはいつどこで娑婆の名残りがつきようと、その人の娑婆生

活は豊かであり、そのまま法界の無量寿をうけとるであらう。

「よくわかりました。有難う」

この男はにこやかに泉青の診察室から出て行った。

○ ○

何もかも我一人のためなりき

今日一日のいのちたふとし

あすありと知るよしもなき我なれば

今日一日を生き抜かんと念ふ

ゆれながら磁針の北をさすがごと

我が足許は 西へ向はん

はづかしや味なき水に味つけし

わがはからひのあはれかひなき

## 一道会の記

昭和五十五年十月二十六日、午後一時から池山栄吉先生の第四十三回追憶会が浄住寺の書院で催されました。参集の方々は九州から東京まで各地から百名に及ぶ多数の方々でありました。相変らず孫が玄関の履物を数えてくるので知らされるのです。

仏前での阿弥陀経の読誦には、今年は参集の人々の助音の聲がひときわ多く唱えられ、一同の読誦でありました。終って先師のお写真に向い歎異抄を拝読する私は、毎年のように「幸に有縁の知識に依らずんば、いかでか易行の一門に入ることを……」の所にくると涙に聲がとだえるのでありました、南無阿弥陀仏。

私は開会にあたって「幸に有縁の知識に依らずんば」のお言葉には、私が池山先生にお会い出来たこと、それは何世代もの過去世から善巧方便の限りを尽して下さった如来の本願力、加威力、広慧力の御導きによることであつたことを述べさせていただきます、先生の御歌

## 榊原徳草

久遠このかた子ゆえの廻向 私一人をかた思い

これがこの頃しきりに胸に浮沈することを述べました。

そして先生の御歌を拝誦しました。

一人ゐてよろこぶ声や明けやすき

白道のかなたやいかに秋の風

白道の彼方につづく紅葉かな

ここはまたどうしたことか暖かき

たまさかに如来に面す春の風

あふむけに仔犬ねころぶ日南かな

歳旦にまづ訪れし念仏かな

衆生かわいや生死の海におのが罪から浮き沈み

○

また「城ヶ島」の歌「船は櫓でやる、櫓は歌でやる、歌は船頭さんの心意気」これを御念仏の心に訓釈されて

歌は念仏、船頭さんは如来、船は本願、櫓は廻向

○

わが庭の萩さかりなりここかしこ 白き孔雀の群れゐるがごと  
来し方の十年の冬をしのぶかな また人生の春をむかえて

もの思へばやるせなきまま思ふこと 思はじとこそ思ひなししか

逢うてまた別るる日なり今日よりは またの逢う日のめぐりそめける

たのまるるただ念仏のわれにあり さるべき業はさもあらばあれ

われならぬ清らのわれのわれにありて 穢悪のわれをわれに知らしむ

よき人の仰せにききて御名をよべば よばはせたまふ御声きこえぬ

右のように先生の数々の御歌をお紹介しました。終つて富山の長谷顕性法兄からの一道会宛の電報を披露しましたムゲノイチドウキヨクマス

次に、故・信国淳先生の専修学院での歎異抄講義の録音を鶴谷純子さんが持参されたので放送し、共々に御生前の先生をしのびました——長い録音なので前半だけで終らせ

ります。自分が知れない所に、自分の道も見えませんが、自分の力が知らされてはじめて自分の行くべき道が定まるのであります。

然し自己を知ることとはむつかしいことで、何千年前からソクラテスが「汝自身を知れ」と提唱しましたが、文豪デエテは「自分を知ることの大切さは誰も知っているが、誰れも実行していない、これからもそうする人は居ないであらう」と云っております。これはゲエテ自身にそのむつかしさを経験し、歎いているのであります。仏典には、鏡はよくものを写すが、自分自身を写し得ないように如何なる智者といえども身辺三尺は暗闇である、といわれている。身びいきな心から自分の都合のわるいことは拒否し、よいことばかりを肯定している。

儒教では、十指のゆびさすところを大切に聞け、と云っています。この方が自分の見た自分よりも確かでしょう。然し人間には愛憎の心が強く、またさばきの心が働いているし、また自分自身に我執我慢が強いのでそれを素直に聞けない。

世間に、子を知るは親にしかず、と云う。親は子に向う時、子の身になっている。子の立場に立って子を理解しようとしている、そこにきびしさとともに温かきがある。だから他人の言うことは聞かなくても、親の云うことは割合

ていただきました。

次に、花田先生のお話は次のようでありました。

御紹介下さった、池山先生のお歌の中の「われならぬ清らのわれのわれにありて、穢悪の我をわれにらしむ」念仏の光に照らされて私共の姿が照らし出されるので、念仏の洗悟作用と先生独特の表現をされました。このことを思い出しながら、聖人の常の仰せを連想いたします。「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」と、御本願を仰がれた聖人が、自分一人のためと仰るのは、われならぬ清らのわれを御自身にいただいていられるところに、「そくばくの業をもちける身」と、煩惱具足の身が、縁にふれて造り出した数限りのない罪業のすべてが照らし出されていられるので、聖人のお心がそのまま池山先生のお心と相通じていると知らされます。

これは、慈光誌にも書きましたが、パスカルの言葉に、「私はキリストによつてのみ神を知った。神を知らされて自分を知らされた」という一句を或人から聞き、私自身は聖人によつて弥陀の本願を知らされ、その本願を仰ぐとき自分を照らし出されましたことを非常に有難く思うのであります。ここに、智慧あきらかに、慈悲極みのない仏陀の御眼に映る自分、お念仏の光に照らし出される自己がいやといえぬ自己の正体であります。しかもそれは煩惱具足の我々の三世にわたりどうするすべもない、三世にわたる全煩惱の全体が照らし出されるのであります。

さて阿弥陀仏が四十八願をおこされましたが、第一の願無三悪趣の願で「もし仏になつたならば、国に地獄・餓鬼・畜生がないようにしたい」とあります。これというのも私共が昼夜に貪欲・瞋恚・愚痴ばかりを続けて、その跡始末もしないでいるので三悪道から遁れられぬことを見抜かれたためであります。

或は第八の願に「他の人の心が見える智慧を得させたい」とありますが、私は父を亡くして五十余年になります。五十七歳で沢山の子を残して死なねばならなかった父の心にはすこしもなれず、父に死なれると自分がこまるのを悲しんだばかりで、文学通り、親心子知らずでありました。こうした私を憐れまれて、他人の心がわかるようにさせずばおかないとお誓い下さったのであります。このように、四十八願の一つ一つを仰げば、一つ一つが私のためと知ら

されるのであります。

然し非常に大切なのは、第十七願と第十八願であります。第十七願は、諸仏称揚の願であります。十方世界の無数の仏達が皆法蔵の名をたたえ、功德をほめて下さるようになりたいという願であります。私は真言宗の在家に生れて、念仏を聞いても有難いとも何とも感じません。そうした私に沢山の方々が入れ替り立ち替り念仏の尊さを聞かして下さいだったのであります。そのお蔭で猫に小判の愚か者に念仏のありがたさを知らせて下さるのであります。

第十八の願は、至心信樂の願で、王本願と貴ばれるのであります。至心とは、仏のおまことであります。それというの、私共が遠い昔から煩惱に汚れきつていて、清淨の心もなく、虚仮不実のかたまりで、いつまでも浮かぶ瀬のないことを見抜かれて、そこを憐まれて救い逃げずばやまじとのおまことであります。信樂とは、このどうしようもない身を飽くまでも、わが一人子とみそなわして、必ず救い逃げ、親子の名告りをあげるようにしたいとのみ心であります。

これは何時も申しあげて恐縮なことです。私が岡山の高等学校の頃、手あたり次第に、すくなくとも千年以上人類の燈炬となっている教えをたずねましたが、教は皆立派でも私がついて行けないのであります。そこで途方に暮れ

第十八願に、信ずる力もない私のために、至心・信樂の誓願をおこされたおもむきもこのようにして知らされてまいりました。更にこの願の欲生心は、私共がこの苦惱のふるさとに執着して、浄土にいそぎまいりたい心もない私だから「一心正念にして直ちに來れ」と、待ちにまされた阿弥陀仏が呼びかけて下さるのであります。池山先生はこれを迷い児を待つ母の悲心になぞらえて「オネガヒタカラスグキテオクレヨ」と訓訳して下さいました。

更に、第十一の必至滅度の願には、佛のおまことを信ずる者を撰取されて飽くまでもお見捨てなく、必ず佛と同じくさとらしめないならば、仏とはならないとのお誓いであります。

又、第二十二の還相廻向の願がありますが、若い頃には有難いには有難いが切実に味えませんでした。私が七十をすぎまして、自分のいのちのはかなさと、自分の力の限界が見えてくるにつけて、この願、浄土に往生して仏となつて、仏のもつ自在のいのちと力をもって、この世に還り、縁ある者から救いとげることの出来るようにさせたことの、この願があります。とはなんといたの、この世にありましようか。もしこの願がなければ、たとえ自分が浄土に生れ得ても、有縁の人々と永遠の別れとなるのであります。

て伯父にうちあけますと、歎異抄を渡してくれました。ほとんど分らぬことばかりでしたが、二三心を打つものがあるが、それを伯父に告げると、池山先生にドイツ語を学んだからよき聞くように、と勤めてくれました。そこで先生をお訪ねして、お導きをうけるようになりました。伯父はわざわざ先生をお訪ねして、私のことをお願いしてくれました。幸にも私はこのように後から押し、前から手を引かれて行きました。

そうした或日、先生をお訪ねして、全校の生徒が先生を尊敬していることを申し、私も今まで先生のような人格者にお会いしたことがありませんと申し上げると「人格者というのに二通りある、無為無能でただおとなしい者をからかって云うのと、文字通りの人格者であるが、前の意味の人格者には思いあたるが、君の云うような人間ではない。自分の手のひらを見るように自分のことはよく知っている。唯他の人と変わったところと云えば、お念仏をいただいているだけだ」と云われました。私はそこでハッと気づかせて貰ったことは、名月を見て美しいと云うが、月には光も熱もない、それは太陽の光の照り返しである、先生の徳はそのまま仏の徳の返照であるとうなづかされました。それと同時に仏の存在は疑えない事実となりました。

以上、御本願をすこし申し上げましたが、心してお本願のおこりを仰がしていただく時、そこに仏の御眼に写る私の姿が知らされ、そこに自分の愚悪さ、無力さが照らし出されるのであります。親鸞聖人は愚禿と名告られ、法然上人が十悪愚痴と仰せられ、源信僧都は、余が如き頑魯の者と仰せられたのも、単なる謙遜ではなくて、仏のまことの光明によって自然にお知りになったのであります。「浄土宗の人は愚痴にかえて往生を遂ぐ」と仰るのも、その消息であります。そこに仏光のもとにわれかしこの慢心が砕かれ、また卑屈の心も洗われて、光明の広海に浮かばせていただくのであります。最近こうしたことを段々と知らされましたので御聞きいただきました。ありがとございました。

花田先生のお話を終って、暫く休憩しまして、緊張を解くことにしました。お供えの御菓子を下げて一同これを頂きお茶に致し、やがて西元先生のお話があり、次のようでありました。

私西元でございます。先ずこうして池山先生を追憶して一処に集ることは浄住寺様のお蔭であります。榊原先生、

花田先生の御恩を思うことであります。なぜかと申しますと、私は足利浄田先生と御縁の深い者でございます。その先生が亡くなられて二十幾年かになります。このような会合を殆んど持つことが出来ません。すねエ（感慨深く語られる）こうした会が出来ましたことは浄住寺様のお蔭で、それを特に感じることであります。

それから私がお話することは徳草先生から前から頼まれています。今日は色々な先生が見えていられますから、私は少しだけ申させて頂きます。

専修学院の信国淳院長先生がお亡くなりになりました。その告別式が京都の岡崎別院でありました。友人を代表して安田先生、東昇氏、特に有難かったのは、大体本派と違って大谷派は余りお念仏を申さないものであります。池山先生のお弟子であられる信国先生は、晩年になる程お念仏を申されるのが多くなられたのが印象深いことでございます。岡崎別院の告別式の締めくくりを竹中先生という学院の方が「お念仏を申しませう」と云われ、一同高らかにお念仏して告別式が終ったのであります。それは非常に印象的でございます。信国先生は専修学院で後半生を送られましたが、或る日曜に先生は、学院でコック帽をかぶって盛り付けをしておられる。それで私は先生がやられなくても学生にやらせたらと申しますと、いや大事なことが、若い時は私と長谷さんが青い顔をしていました。今度お会いするとひかり輝いていられ、身体全体が喜びに溢れていらっしやる。信国先生のお言葉で申せば、人間の命を超えて無量寿のお顔であると切実に感じました。

それから、すこし長くなりますが「救われぬ身にしみわたる御名の声」という句がございますが、この句を耳にしたのは、私がシベリヤから帰りました昭和二十六年だったと思います。奈良の浄教寺でお聞きしたんです。何でも龍谷大学を出られた方の手帳に書いてあったと聞きますが、どなたの作か存じませんでした。ところが先般、今ここに御見えになっている龍大真宗の村上速水先生にお教え頂きました。あれは山田さんです。心当りがあると云われ、友人の曾我是精氏の書物の中に出ていたので龍大卒業の山田さんとわかりました。この方は俳句をたしなんでいた方で、戦地に行かれた時の手帳の最後に書いてあったお言葉のようであります。その方は、曾我氏の「歎異抄に生きる人々」（百華苑出版）に出ていると教えて頂きました。

なお本年八月末に私共がロンドンに到着しましたら、稲垣久雄先生からの置手紙がありました。神戸の父が危篤に近い状態なので今日発つということでした。それでお会いできなかつたのですが、お電話いただき、父は少康状態を

とだから自分がやりますと云われました。この事を申しあげたいと思います。

私この間福井へまいり、武生市の和上苑に木村無相先生を訪ねました。丁度ある方が訪れておられノートに筆記していました。その方は能登半島の法岡龍天さんと云う方でした。毎月一度お訪ねして聞法する方と云われます。

無相さんのお顔は光り輝いておりました。どんなになつていられるか、眼も半分見えな、耳もよく聞こえない、しかし、まあ光顔巍巍として居られました。どちらが病人かと思ひました。私この通り元氣なんです。無相さんの前に立つと向う様がひかり輝いている。アツと思ひました。今日ここに見えて居られる大谷大学の宗教学の小川先生であります。無相さんの言われるのに、先日小川先生が来られて五時間ばかり話しました。全く時間を忘れて、本当に有難かつた、と。

私の顔を無相さんが見てナンマンダブツ／＼と誦えられ、その声は仏様の呼び声でありました。

それから、先きほど徳草さんが、長谷顕性氏の電報を読まれましたが、実は十月十日は長谷さんは京都に一寸来られました。そこに居られる川畑先生と私とが会つたのです

保つておるので近くロンドンへ帰るが、一道会の皆様によろしくとのことでした。昨年参加させていただき非常に感銘しましたと申されました。

実は私最近思うことを一言申上げたいと思います。私はお釈迦様の「自らを灯とし、他に求むる勿れ、法を灯とせよ」と（自帰依、自灯明）、一寸他力真宗と違ふように思えますが、そうではない。「自らを灯として他に依る勿れ」、仏教の主体性、これは十九願に当ります。我々真宗の者が信仰を頂き難いことは、十九願、自灯明を思うのであります。今日の我々が弥陀の本願を頂き難いということ、それはどこにあるかという、私は十九願を軽く見すぎている。花田先生もキリスト教に行き、一灯園を訪ねられた。そのことは聖人におかれて比叡山の二十年間の求道、あのことが大事である。はじめから絶対他力といわれても、頭だけ行つて身体が行かない。「自らを灯として他に依ること勿れ」ここに於て何を教えられるか。そこに何ともならぬ自分、自力無効、機の深信と申しますか、「自身はこれ罪悪生死の凡夫、曠劫より、このかた常に没し常に流転して出離の縁あることなし」と知れてくる。はじめからスツと行けない。私は十九願というものは非常に大事であると思ひます。「自らを灯とし他に依ること勿れ」そこに自分のはからいがい

かに無効であるかが知れて、ここに「自灯明」必然的に「法を灯とせよ」となり、南無阿弥陀仏となります。自分がやってみて行き詰る、これが大事です。行き詰った花田先生が伯父様に会われ、そして池山先生に、自然に「ここに道あり」です。

二十願は「聞我名号、係念我国」（わが名号を聞き、念を我国に係けて）だから念仏申しなさいとなり、そこに「果遂の誓、まことにゆえあるかな」で、この願は大事であります。果遂の誓は蓮如上人のお言葉で言えば「お慈悲にて候あいだ」です、お慈悲であるからいつかは必ず救わずばおかぬ、と。これが二十願の深い意味であると思つたのです。十九願は菩提心を起し、諸々の功德を修する。しかし何ともならない。これが浄土の大菩提心に甦ってくる。法蔵菩薩のお心を頂き、お念仏申す者に、おのずからそれが与えられてくる。二十願の「植諸徳本」、南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏と申しているが、どこか力味返っている所があるのですが、それが御本願の心に入れると、お蔭様でこんな奴めがと、お念仏にかえることになってくる。

親鸞聖人の世界は或意味においてお釈迦様の世界で、お釈迦様は弥陀の本願を説かれる。聖人とお釈迦様は同じことを説かれているとこの頃思つたのです。これで失礼申し上

げます。

### 年 齡 的 時 代

賢くなるにはどうしても年齢をとる必要があると、こつこつも人は考えている、然し実は年齢を取ったから自然に賢くなるという訳にはいかぬ。矢張り若い時と同様に注意しなければならぬ。人は段々と年齢をとると前と違つた性質になるが、一概に前より良い人になるとは限らない。二十代の人でも六十代の人でもやる事によつては別にかわりはない。人が世界を見るのに、或時は平原から、或時は山上から、或時は太古の雪の残る高山の嶺からという風の色々の見方がある。その中の立脚地によつては眼界が広い事はあつても、それだけのことで、その観察が正しいとは云えない。だから文学者が一生の中の各時代に、夫れ々その記念碑と見るべき作品を残す気なら、先ず生れ付いた頭が碑を立てる土台石たるに足るものであること、碑を立てて世人に教えようとする好意のあることが必要だし、次に各時代において明瞭に見たり感じたりする事と、それから何か外の物のためにせずに、ただ考えた通りを正直に述べる事が特に大切だ。こうして出来た作品は、それを書いた時代にさへ適切なものであれば、その後、著者の思想がどう発展しよう変化しても、それはいつまでも適切な作品として伝えられる。

## 念 仏 詩 抄

木 村 無 相

### 今 の 念 仏

香師おおせに  
忘れるたびごとに  
忘れておくれぬ  
お慈悲を思い出して  
念仏申すべし

香師 香樹院徳龍師

ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ

本性をあらわすと

今 の 念 仏  
忘れておくれぬ  
お慈悲の呼び声  
その念仏の  
おこころ聞くこと  
念仏しつと  
おこころ聞くこと

香師おおせに  
悪縁にあうて

本性をあらわすと  
みな阿闍世のごとく  
我が身につまれば  
我が母をも殺す気にな

我が母をも  
我が母をも

ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ

弥陀の正客

香師おおせに  
“ 女人が弥陀の正客と  
知りたなら  
オノがカラダを  
なでてみよ  
五劫思惟のなみだの  
かかりたはこの私よ  
と—— ”

この無相よ——  
ナムアミダブツ

ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ

如来の念力

香師おおせに  
“ うか／＼しておるは  
無宿善  
聞く気になりたが  
御念力のとどいたの  
なり—— ”

如来の念力  
聞く気となつて  
ひとえに聞かしめ  
たもうなり  
それでなければ  
聞くヤツでない

ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ

ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ

善知識のおおせ

香師おおせに  
“ 善知識のおおせに  
思したがうが  
仏願にしたがうの  
なり—— ”

聖人おおせに  
“ よき人のおおせを  
かぶりて信ずるほかに  
別の子細なきなり ”

よき人のおおせ  
如来のおおせ——

ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

死ぬるを転じて

香師おおせに  
“ 死ぬると  
思うな  
生まると  
思え—— ”

死ぬるにあらず  
生まるとなり  
死ぬるを転じて  
生まれさせたもう  
なり——

ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ

# ともしび

花田正夫

さるべき業縁の催せば如何なる振舞もすべしとこそ  
聖人は仰せ候いし。(歎異抄十三条)

私共は腹を立てては相手が悪いからと責任を他に着せているが、内に瞋恚の煩惱がなければ腹が立つはずはない。親鸞聖人は内に煩惱を具足する身とて、業縁次第でどんな業さらしをするかも知れない身であると慚愧していられる思うに、われよし、われは間違いはせぬと決めている人こそ一番あぶないのである。自分は迷いのやまぬ身であると知らされて、こうした身を照覧下さっていつも寄り添うて下さる大悲のお念仏を仰ぐ時、自然に本来の道にひきもどされ、して浄土への旅をたどらせていただけるのである。

本願を信じ念仏申す人は五悪趣の門が自然に閉ざされると正信偈にあるが、自身に五つの迷いの種を持ち合せてい

ると知らされるおかげで、あさましやと慚愧し、仏恩を謝しまつるのである。(昭和五五、七、一〇日)

## 自己を知らされる道

鏡はどんなに立派でも、鏡自身を写し得ないように、いかなる智者でも身辺三尺は暗闇である。ことに身びいきな煩惱に覆われて、われよしという独りよがりにおちてしま

う。パスカルが、キリストによって神を知り、また自己を知らされたと言っているのに深い感銘をうけた。それというのも、私自身は親鸞聖人によって仏を知らされ、仏の本願に照らされて自己の愚悪な正体が見え始めたからである。親は子に無くてはならぬことのために昼夜に苦勞する。

久遠のみ親にまします御仏は、われらをわが一人子とおぼ

しめし、しかも煩惱具足の身故に、遠い昔から迷いの境涯に沈みきつて浮かぶ瀬のないことをお見抜き下さつて、その者を救い遂げずばおくまいと大誓願をおこされ、常時不断にわれらのために苦行を修して下さるのである。その御本願のみ心を仰ぐとき、わが身のあさましき、おろかさも知らされはじめるのである。

(昭和五五・九・二十一日)

碍りなくすべてを照らすみ光はさわりある身のうえ  
にこそ照れ  
白 杵 祖 山 老 師

弥陀仏の第十二の願に光明無量ならんとお誓い下さつて  
いるのも、われわれが身にもつ煩惱のために、いたるところで障えられ苦しむのをあわれまれて、見護りつづけて下さるうためである。また第十三の願に寿命無量ならんとお誓い下さるのも、われわれが何時まで経ってもさとりがひ  
らけず、ひとり立ちが出来ぬのを悲しまれて、何時までも手をとってやりたいとの大悲心の現れである。

白杵祖山老師が直腸ガンで亡くなられた病中に、上記の歌をのこされたのである。ことにお病気のすすむにつけ、言語に絶する苦痛をうけられ、障りの多い中であつて、どうあろうとも捨てたまわぬ大悲のみ光を仰がれて、死の覚

悟さえもいらぬいたのも、しさを讃仰せられたのである。障りあつての救いであつて、障りが無くなつての救いではないことを身をもつてお知らせ下さつたものである。

(昭和五五・十・十二日)

## 浄土宗の人は愚者になりて往生す

(末 灯 鈔)

世自在王仏の、光顔巍巍たる徳光を仰がれた法蔵菩薩は、身にもたれた一切の光が消されて、聚墨(すみのかたまり)同様であると告白された。

また、智慧の文殊菩薩の教に接した善財童子は、迷い  
城とし、高慢の垣をめぐらし、愚痴に覆われ、悪魔を主とした愚者と慚愧された。

夜空に無数に輝く星も、ひとたび太陽がその光芒を放つと、それらはみなその影を没してしまふように、弥陀の心光に照護せられるとき、われよし、われ賢しの思いは消えてただわが身の愚かさが見えてくる。浄土の高僧、源信僧都が頑魯、法然上人が十悪愚痴、親鸞聖人が愚禿と仰つたのは単なる謙遜ではなく、弥陀の光照のもとに、自然にあらわになった御自身の姿である。

(昭和五五・十二・十四日)

## あとがき

只今もう一月も半ばすぎました。本年は格別寒さもきびしく雪も多いようでありますので風邪に御用心の程を。

さて二月は釈尊の御入滅の月、また和国の教主聖徳太子の御忌月で、ことあたらしく追慕されましたことでしょう。

親鸞聖人は、太子を父母と仰がれ、釈迦弥陀二尊を慈悲の父母とお慕いになつていられることは著明なことであります。私共もまた祖師に教えられて、久遠の父母に導かれてまいりましょう。

近角先生の「実生活と真宗教」の標題のもとに、虚仮不実のわが身を何処までもお見捨のない私の御真実を、太子と聖人の御心によつてお知らせ下さいました。われよし、われかしこしと、自己を肯定し、他を責めている盲点を深く省みさせられますことです。

井上様の「聞書抄」で、信の上にひらける四海の内皆兄弟の法味を知らせて下さいまし

た。我執我慢ばかりで、いたるところに我他彼此の抗争の繰り返される世に、真実のやわらぎとやすらいの光の射し来る趣き、人生の黎明ここにと讃えずにはいられません。

長崎で篤信の医師として多くの人々に法味を領かって下さった高原憲先生の「水の味」から、信生活の一片を転載させていただきました。見るもの花にあらずということなしと芭蕉翁は申しました。名医著婆大臣は、葉でない草木はないと申したそうであります。先生は御自身の医業の中に到るところに仏のみ声を聞きとられた方でありました。

榊原様が一道会の模様を克明にテープから筆写して下さいました。お蔭で慈光に頂き皆様にお読みただけですについて、いつも深謝しております。ことに池山先生の四十三回忌にあたり、遠く深いお慈育を憶念いたしました。

木村さんは、雪深い武生市ではありませんが和上苑は暖房も充分で軽い風邪も無事に迎春されました、おめでたいことであります。

## お願い

送料が上がりましたので、定価を変更しま

した。すでにいただいておりますものはそのままお送り致します。

## 御案内

- 毎月第一、第三日曜、午後一時半 一道会例会。一道会館の南隣り、南区駆上町二の八六。鬼頭康彦氏宅市バス、新郊通り一丁目下車、東入ル三筋目、角。
- 地下鉄、新瑞橋終点下車。
- 教西寺、法話会。昭和区小桜町二丁目四月二十四日、午前・午後。
- 市バス、御器所通り又は北山下車。
- 地下鉄、御器所通り下車。
- 蓮光寺修道会。毎月七日午後一時半。(但し日曜を除く)尾西市三条板倉名鉄新一宮駅よりバス、西三条下車。

定価	半年	八〇〇円(送共)
	一年	一六〇〇円(送共)
編集・発行人	花田正夫	
印刷	愛知県西加茂郡三好町大字福谷坂部光雄	
発行所	名古屋市南区駆上町二ノ八八	
振替口座	名古屋 慈光社	
郵便番号	一〇四七〇番	
	四五七	